



TSUGIO TOKUNAGA
ZIGEUNERWEISEN

FAVOURITE VIOLIN PIECES

VIOLIN: TSUGIO TOKUNAGA

PIANO: SONOKO MAEJIMA

DAMP

DOCD-0006

●ヴァイオリン名曲集 愛の喜び・ユーモレスク

徳永二男

チゴイネルワイゼン

徳永二男(ヴァイオリン)前島園子(ピアノ)/全14曲(72'24")

T.NO

- ①愛の喜び(クライスラー) 2'58"
- ②愛の悲しみ(クライスラー) 3'08"
- ③美しきロスマリン(クライスラー) 1'47"
- ④ロマンス第2番へ長調 作品50(ベートーヴェン) 8'13"
- ⑤ラ・フォリア 作品5の12(コレルリ) 10'37"
- ⑥ハンガリア舞曲第5番(ブラームス) 2'31"
- ⑦ロマンスイ長調 作品94の2(シューマン) 4'38"
- ⑧ユーモレスク(ドヴォルザーク) 3'07"
- ⑨モスクワの思い出 作品6(ヴィエニャフスキ) 7'36"
- ⑩カプリース第24番 作品1(パガニーニ) 4'07"
- ⑪序奏とロンド・カプリチオーソ 作品28
(サン=サーンス) 8'41"
- ⑫スペイン舞曲(ファリャ) 3'16"
- ⑬亜麻色の髪の乙女(ドビュッシー) 7'59"
- ⑭チゴイネルワイゼン 作品20-1(サラサーテ) 7'59"





制作にあたって

DAM会員の皆様、日頃のご愛顧誠にありがとうございます。
いよいよ秋のオーディオ・シーズンの到来ですが、特に話題の中心はコンパクト・ディスク（CD）ではないでしょうか。

CDは'82年の発売以来4年を経て、その機能、性能も充実し価格もお手頃になってまいりました。

そのCDの良さは、何といてもコンパクトで取扱いが簡単、また聴きたい曲の頭出しがすぐできること、更に長時間連続的にノイズの少ないクリアな音で楽しめる、ということでしょう。

そこで今回のDAMオリジナルCD第6作は、そのCDの特長を生かして、どなたでも知っている小品を14曲、CDディスクの限界に近い約72分に収めました。

この「徳永二男◎チゴインルワイゼン」は永年の念願であったヴァイオリン名曲集を、「ソフトピア」開店一周年、「NEW VIPメイト」発足一周年記念としてDAMオリジナル録音したものです。

徳永二男氏は、NHK交響楽団の第一コンサートマスターを務められ、皆様もTV等で良く御存知のことと思いますが、日本を代表する実力派ヴァイオリニストとして、ソロや室内楽活動も積極的に行っているらしいです。伴奏の前島園子さんは、オーストリアのモーツァルトウム音楽大学の講師の他、ヨーロッパを中心に活躍されているピアニストです。

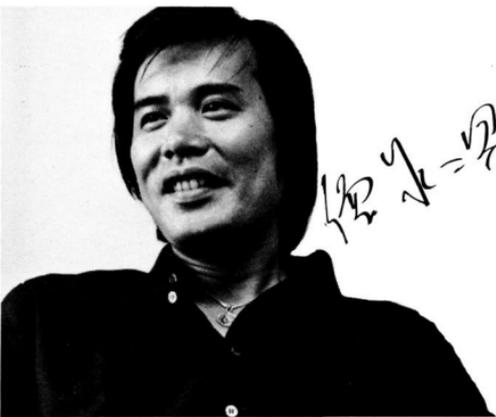
曲目については、徳永氏と相談の上、大変良く知られている名曲ばかりを15曲、徳永氏の御希望もあり、響の豊かな音の良いホールとして評判の洗足学園前田ホールで8月28・29日の両日に渡って、CD用デジタル録音とアナログ録音を行いました。（アナログ録音は、DAM45・2枚組として第26回「マニアを追い越せ！大作戦」で発表いたします。）

15曲70分以上の録音とあって、両日、9時間を越えるハード・スケジュールでしたが、徳永氏の永年つちかわれたプロとしての実力と超人的ともいえるスタミナ、そして前島さんの絶妙なサポートがあって、素晴らしい演奏を予定通り無事収録することができました。

小品とはいえ、バガニーニをはじめ超絶技巧を要する難曲の数々が、徳永氏の磨きぬかれたテクニックと美しい音でレコーディングされています。

古今の名曲14曲、素晴らしい演奏、最新優秀録音と、ヴァイオリン名曲集のCDとしては他に類を見ない三拍子揃った、このDAMオリジナルCDを、心ゆくまでお楽しみいただければ幸いです。

なお、本CD製作にあたっては、徳永二男氏、前島園子さん、洗足学園、東芝EMI㈱及びスタッフ各位に多大なご協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。



●演奏者について●

徳永二男は、横須賀市に生まれ、ヴァイオリニストであった父と鷺見三郎に師事してヴァイオリンを学ぶこととなりました。そして、毎日学生コンクール小学校の部で第1位を獲得するなど早くからその才能を発揮した彼は、1962年に桐朋学園高校音楽科に入学し、小澤征爾や秋山和慶らの師として知られる名教授の齋藤秀雄のもとでさらに研鑽を重ねました。その後、1965年に第34回音楽コンクールに入賞を果たした彼は、早くもその翌年に東京交響楽団のコンサート・マスターに就任し、日本楽壇史上最年少のコンサート・マスターとして注目を集め、ソリストとしても精力的な活動を開始するまでに至っています。

しかし、さらに研鑽に意欲を燃やす徳永は、1968年に文化庁海外派遣研修生としてベルリンに留学し、ミッシェル・シュヴァルベのもとで技を磨き、1974年には、第5回チャイコフスキー・コンクールでディプロマ賞を受賞しています。そして、この頃から海外でも華々しい演奏活動を行なうようになった彼は、ブルガリアやソヴィエト各地でリサイタルを開催したり協奏曲をオーケストラと協演したりして好評を博していますが、その秀れた力量を広く認められることとなった彼は、1976年にNHK交響楽団の



コンサート・マスターに就任しています。

それからの徳永は、NHK交響楽団のコンサート・マスターとして活躍を続けるだけに留まらず、ソロや室内楽の領域でも活発な演奏活動を行ない、現在の彼は、我が国で最も多忙なヴァイオリニストとなるまでにも至っています。ちなみに、彼の使用楽器は、1716年製の銘器ストラディヴァリウスだということです。

このアルバムで徳永二男と協演している前島園子は、桐朋学園高校音楽科と同大学に学び、岡林千枝子、井口愛子、斎藤秀雄らに師事したピアニストです。1969年に桐朋学園大学を首席で卒業した彼女は、その翌年にオーストリアに留学し、モーツアルテウム音楽大学に入学しました。そして、1973年に同大学を首席で卒業し最優秀賞をも得た彼女は、モーツアルテウム財団からリリー・レイマン・メダルを授与された他、ジュネーヴ国際コンクールやエット・レ・ポッツォリ国際ピアノ・コンクールにも入賞を果たし、ヨーロッパ各地でソロや室内楽等に意欲的な活動を開始しています。なお、現在の彼女は、モーツアルテウム音楽大学の講師を務める傍ら、オーストリアを本拠としてヨーロッパ各地で活発な演奏活動をも続けています。



ヴァイオリン音楽の魅力をも堪能できる選曲と、

このアルバムのこと 柴田龍一

● このアルバムのこと

ヴァイオリンという楽器は、さまざまな楽器のなかでもピアノと共に最も広く親しまれることとなっていますが、その魅力や持ち味は、ヴァイオリンの旋律楽器としての特性にその殆んど大部分が由来するものといえます。そして、多くの種類の旋律楽器のなかで王者としての位置を占めているヴァイオリンは、単に甘美な歌を歌い継ぐだけでなく、実にヴァラエティに富んだ表現力を誇る楽器といえますが、ヴァイオリンのその多彩で豊かな表現力は、古くから大作曲家たちを強く惹き付け、彼らに数多くの名作を生み出させることとなってきました。

このアルバムには、バロックから近代に至る作曲家たちの作品が収録されていますが、これらは、数あるヴァイオリンのための名曲のなかでも特に魅力的で秀れた作品といえるものばかりで、以前から幅広く根強い人気を保ち続けている名作中の名作ばかりです。ここでは、誰の心をも捉えずにはおかない名旋律の数々だけでなく、スタッカート、ピチカート、ダブル・ストッピング等のヴァイオリンの技巧を巧みに生かした華やかな名人芸などを心ゆくまで味わうことができますが、これこそは、ヴァイオリン音楽ならではの楽しみに他なりません。

そして、このアルバムのもう1つの魅力は、徳永

二男の力強くすがすがしい快演にあるといえます。我が国ヴァイオリン界のホープとして活躍を続ける徳永は、稀にみる卓越したテクニックと若々しくみずみずしい表現力をその持ち味としたヴァイオリニストですが、彼の説得力に溢れる名技は、ヴァイオリンの名曲の数々からその魅力を存分に引き出すまでも至っています。そして、名曲の名演奏を収録したこのアルバムは、最新録音ならではの鮮やかな音質とも相俟って、きっとヴァイオリン音楽の醍醐味を堪能させてくれることとなるに違いありません。

● 曲目について

● クライスラー：愛の喜び

「愛の喜び」は、同時に出版された「愛の悲しみ」と対をなす作品で、クライスラーの故郷ウィーンの古い舞踏歌のスタイルによるワルツとなっている小品です。いかにも愛の喜びを想わせる輝かしくロマンティックな味わいのなかに、ウィーン子クライスラーならではの優美で暖かい情感が息づいている珠玉の1曲といえます。

● クライスラー：愛の悲しみ

「愛の喜び」と共にクライスラーの代表作として親しまれているこの「愛の悲しみ」は、やはりウィーンの古い舞踏歌のスタイルによるワルツとなって

みずみずしい演奏です。

います。そして、ここでは優美な面持ちのなかに、いかにも愛の悲しみを想わせるかのようなメランコリックな抒情がいっぱいに溢れています。

●クライスラー：美しきロスマリン

今世紀前半を代表する大ヴァイオリニストの1人であったF.クライスラー（1875-1962）は、作曲家としても多彩な活動を展開した人物ですが、なかでも自らが演奏することを目的に作曲された多くの小品は、いずれも親しみ易い魅力に富んだ傑作です。一方、ロスマリンとは、香り高い花を咲かせる「まんねろう」のことですが、愛らしい女性のアラベスクともなっています。そして、この「美しきロスマリン」は、清らかな乙女に託したクライスラーの思い出といった性格が著しいロマンティックな小品です。

●ベートーヴェン：ロマンス第2番

ロマンスとは、ロマンティックな性格を特色とした甘く優しい音楽のことです。そして、L. V. ベートーヴェン（1770-1827）は、その生涯にヴァイオリンのための2つのロマンスを書き残していますが、この第2番は、第1番と比較してより一層旋律線の美しさがきわ立っているロマンスで、さらにそこに息づく清冽な抒情がたいへん印象深い魅力的な1曲です。



●コレルリ：ラ・フォリア

A.コレルリ（1653-1713）は、バロック後期に活躍したイタリアの作曲家、ヴァイオリニストです。そして、コレルリの代表作として知られるこの「ラ・フォリア」は、1700年にローマで出版された12のソナタ集の第12番にあたるもので、ソナタというものの、主題とその変奏でまとめられている楽曲です。ちなみに、フォリアとは、ポルトガルに起源をもつゆったりとした舞曲のことですが、ここでは、そのフォリアの旋律が主題として用いられています。

●ブラームス：ハンガリア舞曲第5番

ジプシーの音楽に高い関心を寄せていたJ.ブラームス（1833-1897）は、ピアノ連弾のために「ハンガリア舞曲集」をまとめあげましたが、この曲集は、後にオーケストラのためにも編曲され、爆発的な人気を博すこととなりました。そして、そのなかでも特に人気のあるこの第5番は、エキゾチックな色彩感とエネルギーに満ちた曲想がまさに絶妙な一致を遂げた名作で、ヴァイオリンのための編曲によっても広く親しまれています。

●シューマン：ロマンス

ロマン派音楽の推進者として知られるR.シューマン(1810-1856)は、1849年にオーボエのための3つのロマンスを作曲していますが、この作品は、さまざまな旋律楽器のためにも編曲されています。そして、ここに収録されたその第2番は、静かで清純な美しさが限らないロマンスで、そこには、いかにもシューマンらしい夢想的で激しい情熱とロマンもがいったいに満えられています。

●ドヴォルザーク：ユーモレスク

A.ドヴォルザーク(1841-1904)は、チェコスロヴァキアの国民楽派を代表する作曲家として有名な人物です。そして、ヴァイオリンのための編曲によって親しまれているこの「ユーモレスク」は、ユーモラスな独自のリズムと素朴にして甘美な旋律の美しさの特徴とした小品です。なお、この作品は、1894年に作曲されたピアノのための8つのユーモレスクの第7番をその原曲としています。

●ヴィエニャフスキー：モスクワの想い出

H.ヴィエニャフスキー(1835-1880)は、ポーランドの生んだ19世紀を代表する大ヴァイオリニストで、作曲家としてもロマンティックなヴァイオリン曲の数々を手掛けています。そして、ヴィエニャフスキーが18歳の時に作曲したといわれるこの「モ

スクワの想い出」は、有名な「赤いサラファン」というロシア民謡の旋律を素材とした一種の幻想曲で、ヴァイオリンの華やかなテクニックと甘美な表現力の双方が生かされた小品となっています。

●パガニーニ：カプリース第24番

N.パガニーニ(1782-1840)は、超人的なテクニックを誇るイタリアの生んだ伝説的なヴァイオリンの名手で、自らが演奏するために超絶的な技巧をふんだんに盛り込んだヴァイオリン曲の数々を作曲しています。そして、無伴奏ヴァイオリンのための24のカプリースは、パガニーニの代表作として有名ですが、単独でも演奏される機会の多いこの第24番は、主題とその11の変奏によってまとめあげられている大規模な小品です。

●サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ

C.サン＝サーンス(1835-1921)は、ピアニスト、オルガニストとしても華々しい活躍を続けていた近代フランスの作曲家です。そして、スペインの大ヴァイオリニスト、サラサテによって初演されたこの「序奏とロンド・カプリチオーソ」は、さまざまなヴァイオリンの技巧が盛り込まれた演奏効果の高い小品で、サン＝サーンスならではのエスプリに充ち溢れた優雅な味わいや、多彩な変化に富んだ華麗な曲想などがたいへんに魅力的な名作です。

●ファリャ：スペイン舞曲

M. D. ファリャ (1876-1946) は、フランス印象派音楽の影響を採り入れた独自の民族主義的作風によって知られるスペインの作曲家です。そして、歌劇「はかなき人生」はファリャの出世作となった作品ですが、その第2幕のはじめて演奏されるこの「スペイン舞曲」は、豊かな民族色とダイナミックな起伏に富んだ音楽で、オーケストラのためのピースとしてだけでなく、ピアノやヴァイオリンのための編曲によっても広く親しまれています。

●ドビュッシー：亜麻色の髪の乙女

C. A. ドビュッシー (1862-1918) は、印象派音楽のバイオニアとして知られる近代フランスの作曲家です。そして、全12曲より成るピアノのための前奏曲集第1巻は、そのドビュッシーの代表作の1つに挙げられる作品ですが、その第8曲にあたるこの「亜麻色の髪の乙女」は、簡素な旋律と自在なハーモニーを特色としたいかにも印象派の作品らしいユニークな1曲で、ヴァイオリンをはじめとするさまざまな楽器のための編曲によっても広く愛聴されています。

●サラサーテ：チゴインエルワイゼン

P. D. サラサーテ (1844-1908) は、パガニーニと並び称せられる19世紀スペインが生んだ大ヴァイ



オリニストで、自らが演奏するために技巧的なヴァイオリン曲の数々を作曲しています。そして、彼の代表作として名高いこの「チゴインエルワイゼン」は、ジプシーの音楽に取材した作品で、ヴァイオリンの輝かしい名人芸が展開されるなかに、生々しい情熱や愁いに充ちた抒情をふんだんに湛えた魅力的な傑作です。



RECORDING REPORT

レコーディング・レポート 樋口美幸

すばらしい音楽をつくるための熱気,

レポーターの樋口さんは、いつもはイベントのコンパニオンやファッションショーの司会などで活躍されているお嬢さん。今回は、レコーディングという彼女の初めての体験を通して、若く、新鮮な目で演奏者のお二人を追っていただきました。

8月28日。ここは洗足学園前田ホール。素敵な音楽に逢えるうれしさ半分、レポーターとしてのプレッシャー半分で、私、もうドキドキしています。

午前9時に機材の搬入が始まり、レコーディング準備に約2時間。

11時。徳永二男さん、前島園子さんがお見えになって、その20分後には早速リハーサルが始まりました。

テストにテストを重ね、何度も何度もピアノとマイクの位置を変えて……。これはヴァイオリンの自然な柔らかい音、暖い音を再現するためのセッティングです。

——この前田ホールは、今回、徳永さんご自身が特に望まれたホールがそうですが？

徳永「僕の所属しているN響がこのホールでこけら落としをしました。ここはいんだよね。少し小さ

めだけど奥行き、幅、この箱形。音の反響を体で確かめられ、安心して演奏できる。クラシックのために造られたホールだしね。」

演奏中の表情とまったく違うんです。笑顔がとっても素敵で……。第一印象もそうでした。陽によく灼けて、ヨットがよく似合いそうなスポーツマンタイプで。

そういえば、徳永さんはファンクラブをお持ちなんですよね。クラシック界ではあまり例がないんじゃないかしら。

活動のメインは会員のためのサロンコンサート。その他にも夕食会や誕生会。また、録音されたものを優先的に分けていらっしゃるとか。コミュニケーションをとっても大切にしたファンクラブの様です。徳永さんファンの方にはぜひおススメしたいですね。

3時間もの念入りなりハーサルを経て、ピアノとマイクのセッティングは完璧。さあ、本番の開始です。

ミキシングルームは静まりかえり、緊張感に空気はピンと張りつめたよう。そして、いきなり、美しく調和された音楽が広がって……。それが……何て言葉にすればいいんでしょう……ただ感激。泣きたくなくなっちゃうくらいに。心がきしむくらいに。押し寄せてくる感動で倒れそうです。五感を音を感じま



肌で感じる体験でした。



す。……なんて素敵。

レコーディングとはというと、演奏者とスタッフ両者の納得ゆく音探し。求める音が録れるまでは絶対妥協なんてしません。一曲あげるために、ステージとミキシングルームを何度も往復し、プレイバックされたものを聴き、細かいチェックを入れる演奏者とスタッフ。静かで張りつめた空気の中にもたいへんな熱気。

そんな録音の合間に伺ったお話です。

——お二人とも桐朋学園のご出身だそうです。

お二人「そうそう。」

前島「あの頃は厳しい授業だったわね、実技重視で。」

——今は？

徳永「生徒が平均化され、ムラは無くなり、ツブは揃っているけれど、パーソナリティが無くなってきているよね。——僕は斎藤秀雄先生に意識的に育てていただいた。そういえば、いい指揮者というのは、いい音楽づくりをするよね、いろんな意味で。」

前島「そうね。音楽づくりって、一言でいえば“強



さ”ね。それはたとえ亡くなくても残るものだし。」

——いい先生というのは、どうい先生ですか？

徳永「いい先生っていうのは生徒への要求度が高いね。だから生徒はそのレールの上に来るまでがすごく大変なんだ。」

——前島さんは？

前島「ええ、井口愛子先生に。言葉は厳しいけれど、やっぱりいい先生なのよね。」

——ところで、外国のいろんな方とも協演されていますが、特に印象に残っているもの、ありますか？

徳永「う〜ん。いろいろな印象はあるし、一言ではいえないよ。そうだなあ……、先年亡くなられたロヴロ・フォン・マタチッチという指揮者と協演した事があるんだけど、その時はもう随分お年を召されていて、ツアーの途中で松葉杖から車椅子に変わるくらい体力的にも大変でね。でも指揮棒を振る彼の意図はなぜか驚くほど伝わってくるんだ。スゴイよ。」

——徳永さんはN響のコンサートマスターでいらっしやいますか、コンサートマスターってどんな事をなさるんですか？

徳永「弓の上げ下げの指示。そして指揮者とみんなのパイプ役だな。オーケストラって、指揮者がいて、一番前に弦楽器があって、木管、金管そしてパーカッションでしょ。そんな音の距離感を無くしてあげ



る役。信用で結ばれていなければならないね。」

——ご使用のヴァイオリンはストラディヴァリウス・パロン・オープンハイマーですね。

徳永「別にストラディヴァリウスだから使っている訳じゃあないんだよ。ただ“もう少しいい楽器だとこの音はもっと綺麗に出るのに”というのが重なり重なり、行きつくところがストラディヴァリウス。表現力が豊かだし、自分の要求度に応えてくれる。健康な楽器だよね。」

——ヴァイオリンって、とってもデリケートな楽器だそうですが……。

徳永「そう。湿度、気圧に凄く敏感。ヴァイオリンで次の日のお天気がわかる程だよ。湿度が高いと、弓をおく高さ、魂柱(こんちゅう)も変わってくる。弓っていうのは馬の尻尾で出来てるんだけど、湿度のひどく高い時は、長さが2センチも変わっちゃうくらいだ。」

それにしても、本当に素敵な方々なんです。自分に厳しく人には優しいっていうのかしら……。言葉の端々にそんなものが感じられるんです。

さて、その後も録音は精神的に続けられ、演奏も凄い盛り上がりを見せてくれます。そして、丁寧に

丁寧に、一曲づつが仕上がってゆきます。

二日目。10時半には録音開始。前日からの盛り上がりがずうっと続いていて、とても順調に進みます。うわあ、昨日と同じ緊張感と熱気。“いいレコードを作りたい”という全員の気持ちに伝わってきます。

私はただただ驚きっぱなし。だってそうですよね、今まで何気なく買っていたレコード、その制作が、こんなに大変だなんて思いもよらなかったのですから……。

それにしても皆さん、タフです。特に徳永さんは。「まる二日の録音、ベース配分を少し心配したけど、スタミナが持ったよ。適度な緊張感を持つ、納得できる録音だったな。」そう、後でにこやかにおっしゃっていましたが。

レコーディングを始めて何時間経ったのかしら。“時間の経過が早いのか遅いのかわからないな。”なんて思う頃、全曲が完成しました。午後7時20分。最後のチェックをしている演奏者とスタッフ。まわりの空気は二日間の張りつめたものから穏やかなものへと、ゆっくり変わってゆきます。終了。ホッとした様な、もっと聴きたいなあと残念なような……。



● RECORDING REPORT ●



——前島さん、お疲れ様でした。このレコーディングを終えてのご感想を。

前島「和気あいあいとして、いい雰囲気できりやすかったですね。」

——世界を股にかけて大変な活躍ですが、ピアノはヴァイオリンみたいに持ち運び出来ませんか？その時その時で良かったり悪かったりしませんか？

前島「以前は、このピアノは弾きやすいとか弾きにくいとか思っていたんですが、今は段々と合わせる事が出来るようになりました。」

——じゃ、技術の他にもそういう事が要求されるという事ですか？

前島「いいえ、それが技術なんです。」

——オーストリアを始めとした海外で演奏する時と、日本での時と、何か違いみたいなものはありますか？

前島「そうですね。観客との会話かしら。演奏する事によって話しかけて、聴くことによってお客様も応えてくれて。その会話が楽しいですね。ただ、日本ではまだクラシック音楽の歴史が浅いせいか、その会話がありません……。もっともっと会話したいって思います。」

——数日前に日本にいらっしやっただけですが、失礼ですけど時差で大変じゃ……。

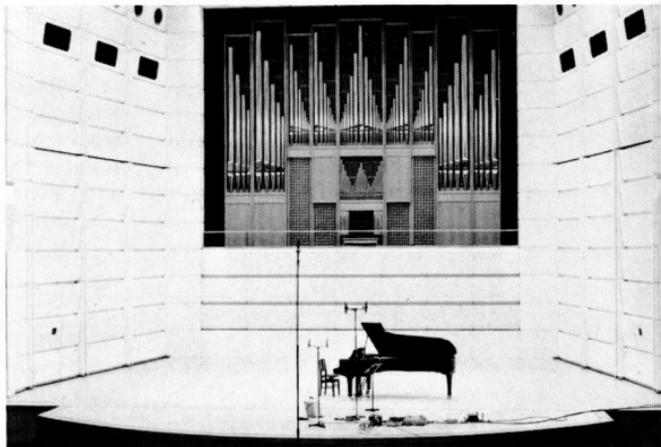
前島「今年はまだ4～5回往復しているの、時差ボケボケです。(笑)10月にザルツブルクへ帰ったら、今年はまだゆっくりする予定です。」

——個人的ですが、二日間、耳に体に気持ちよくなって。素晴らしい音楽が聴けて、とっても嬉しくて。前島「そうしてもらえると嬉しいですね。結局そうなんです。好き、嫌い、耳に気持ち良いかどうか——なんです。」

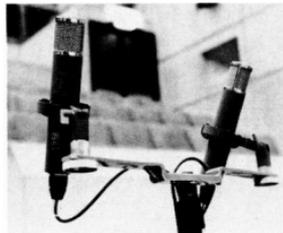
前島さんて、女性らしい優しさに溢れる素晴らしい方です。音楽を離れると、著名なピアニストというより、山の手の優しいお花の先生というイメージ。同じ女性として憧れます。私もいつかは、こんな素敵な女性になりたいって、心から思います。

スポットに照らされたステージでは、最後のジャケット写真の撮影が行なわれています。それを見ながら、この二日間の貴重な体験をかみしめます。

想像していたものをはるかに越える、素晴らしい音楽のディナーでした。ただ、それを真から味わうだけの舌を持っていない自分を、少し悔しく感じます。そして、このレコードを手にする方には、この一枚のレコードの重みを、ぜひ感じて頂きたいって、今、心から思っています。



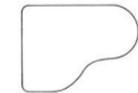
ノイマン SM-69



AKG TUBE

マイク・セッティング

洗足学園
前田ホール

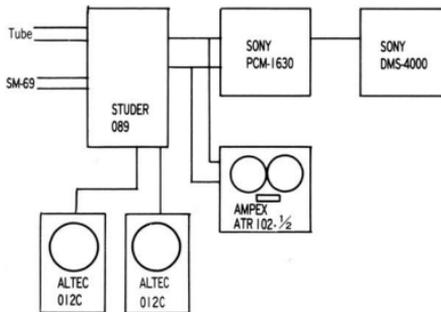


AKG-Tube



NEUMANN
SM-69

録音ダイアグラム



スタッフ

総合プロデューサー：小山正敏，八田甫

プロデューサー/ディレクター：里見清司

バランス・エンジニア：池田彰

ピアノ・チューナー：藤村周作

ジャケット：(株)グラバー企画

フォトグラファー：伊藤隆

制作協力：洗足学園

録音場所：洗足学園前田ホール

録音年月日：1986年8月28, 29日

企画・制作：DAM推進委員会 **DAMPC**

製造：東芝EMI株式会社

DAMオリジナルDOCD-0002(乙女の折り／宮沢明子)の解説書(4頁以降)はDAM45を流用し、解説中、録音ダイアグラムもアナログ使用となっていますが、本CD同様SONYデジタルプロセッサ(PCM1610)を使用しております。



ヴァイオリン名曲集 愛の喜び・ユーモレスク

徳永二男/チゴインエルワイゼン

徳永二男(ヴァイオリン) 前島園子(ピアノ)

- | | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 愛の喜び/クライスラー 2'58" ① | ⑧ ユーモレスク/ドヴォルザーク 3'07" |
| 愛の悲しみ/クライスラー 3'08" ② | ⑨ モスクワの想い出/ヴェニエミアフスキー 7'36" |
| 美しきロスマリン/クライスラー 1'47" ③ | ⑩ カプリース第24番/パガニーニ 4'07" |
| ロマンス第2番/ベートーヴェン 8'13" ④ | ⑪ 序奏とロンド・カプリチオーソ/サン＝サーンス 8'41" |
| ラ・フォリア/コレルリ 10'37" ⑤ | ⑫ スペイン舞曲/ファリャ 3'16" |
| ハンガリア舞曲第5番/ブラームス 2'31" ⑥ | ⑬ 亜麻色の髪の乙女/ドビュッシー 7'59" |
| ロマンス/シューマン 4'38" ⑦ | ⑭ チゴインエルワイゼン/サラサーテ 7'59" |